

# ウフタⅡ遺跡

1995年3月

龍郷町教育委員会



## 報 告 書 抄 録

フリガナ					
書名	ウフタⅡ遺跡				
副書名					
巻次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編集者名	中山清美				
編集機関	龍郷町教育委員会				
所在地	鹿児島県大島郡龍郷町赤尾木ウフタ				
発行年月日	平成7年3月31日				
フリガナ					
所収遺跡名	ウフタⅡ遺跡				
フリガナ					
所在地	鹿児島県大島郡龍郷町赤尾木ウフタ				
調査期間					
調査面積㎡					
調査原因	道路拡張工事に伴う				
出土遺物・遺構	主な時代	主な遺構	主な遺物	出上量	
	縄文時代 グスク時代	なし "	土器片 類須恵器	少 1	景 点



## 序 文

県道拡張工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われましたが、特に赤尾木地区は本町でも遺跡が多い地区であります。埋蔵文化財をはじめ、町指定文化財になっております「ハヤ墓」なども所在しております。今回発掘調査が行われたウフタ遺跡は1982年に北側が熊本大学考古学研究室によって発掘調査が行われ、多くの遺物が出土しました。今回はその接地が道路拡張されることで発掘調査を行いました。県教育委員会・大島支庁土木課には、文化財保護行政を進める町の立場をご理解頂き深くお礼申し上げます。また調査の指導を笠利町歴史民俗資料館中山清美氏に御協力頂きました。

ありがとうございます。

1995年3月  
龍郷町教育委員会  
教育長 田 畑 米 秀

# 本文目次

## 報告書抄録

### 序文

#### 第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	1

#### 第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と環境	2
第2節 遺跡の概要	3

#### 第3章 周辺遺跡

第1節 赤尾木地区の遺跡	7
--------------	---

#### 第4章 発掘調査

第1節 層序	12
第2節 出土遺物	
第3節 自然遺物	15

#### 第5章 調査の成果と今後の課題

	16
--	----

# 図別目次

第1図 海流図	2
第2図 文化圏区分図	2
第3図 北大島遺跡分布図	4
第4図 トレンチ配置図	6
第5図 周辺遺跡図	9
第6図 トレンチ位置図	11
第7図 層序	13
第8図 土器実測図	14

## 第1章 調査経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

1988年に奄美空港が開港し、名瀬-空港間の道路整備が急ピッチですすめられている。1市2町にまたがる主要道路工事は、周知の遺跡も含めて計画の中に入っている。そのため発掘調査が行われる。調査は県文化課と龍郷町教育委員会、大島支庁土木課と協議が行われた。その結果ウフタ遺跡と半川遺跡の中間にある砂丘上のため道路拡張区域部分の発掘調査を行うことになった。砂丘は地主との話し合いがもたれ、笠利町歴史民俗資料館に発掘指導を依頼して実施することになった。

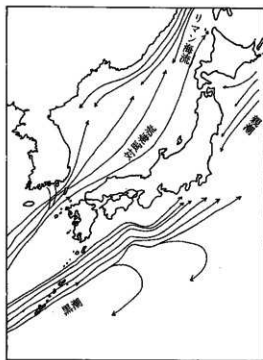
### 第2節 調査の組織

調査主体者	龍郷町教育委員会		
調査責任者		教育長	
調査事務・調査担当者	〃	社会教育課長	山口 敏美
〃	〃	〃 補佐	牧 智登美
〃		派遣社教主事	玉泉 真二
〃		社会教育指導員	水野 哲哉
発掘指導者	笠利町歴史民俗資料館		中山清美
調査指導者	日本考古学協会員	白木原和美	(元熊本大学教授)

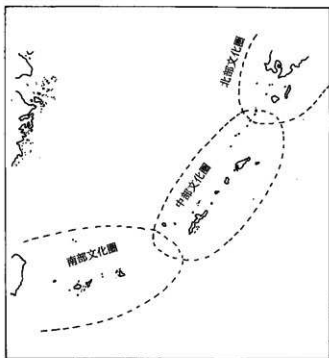
尚、調査においては龍郷町文化財保護審議会委員をはじめ、多くの方々より助言と指導を頂いた。

### 第3節 調査の経過

本遺跡は県道拡張工事に伴い、1973年から遺跡の有無について大島支庁土木課から問い合わせがあり、県文化課と笠利町歴史館に指導を受けていた。その結果赤尾木地区の砂丘は遺跡としての可能性が高いので確認調査を行う必要があるとの判断を頂いた。1986年に本町教育委員会が発行した「龍郷町の埋蔵文化財」にウフタ遺跡と半川遺跡の間が空白になっているため遺跡の可能性は高いと思われた。大島支庁土木課と地主との話し合いが合意したため、今年度中に確認調査を行い、遺跡の範囲と遺物包含層の確認を行うことにした。調査は笠利町歴史館、大島支庁土木課の職員の立ち合いのもと、地主の了解を得てグリット法式で発掘を行った。期間中白木原和美先生の指導と助言を頂いた。



第1图 黑潮海流图



第2图 南岛文化圈区分图



## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と環境

鹿児島から台湾にかけて弧状に重なる島々、有人、無人の島々はおそらく数・百島になろうこれらの島々が黒潮海流の真中に見えかくれしている。台湾の南方に発流して北上する黒潮は、地球の大動脈の如く幅約200km・水深約200km・水温約15℃以上・時速約8kmという大潮流であり、弧状に連なる島々を抱き、日本列島まで暖かく包み込んでいる。弧状の黒潮が昔から富をもたらし、新しい文化を乗せて北上し、その流れの反流で北からの文物も乗せてくれた。我が南島はまさに北の文化、南の文化、大陸の文化をこの黒潮の影響で与えられて来た。まさに「黒潮文化」であろう(第1図)。

南島を国分直一は三つの文化圏に区分した。トカラ以北を北部文化圏、奄美・沖縄を中部文化圏、八重山以南を南部文化圏として、その文化の相違によって区分している(第2図)。中部文化圏に当たる奄美・沖縄諸島は、先史時代から類衣する土器文化を持ちながら、その共通性と相違点については未だ具体的に明らかにされていない部分が多い。近年になってようやく考古学的立場から調査が行われ始めた奄美では、まさに九州本土と沖縄の谷間となっていた学問の一部を埋めようとする作業がようやく始まったと言えよう。

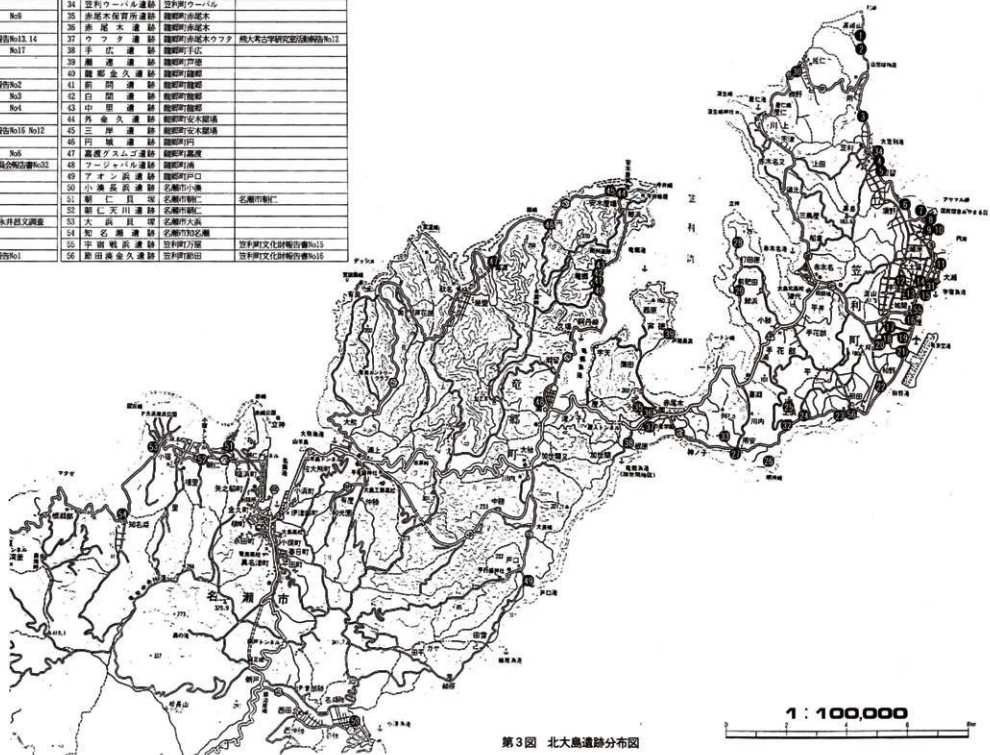
この奄美諸島は5つの主島から成り、喜界島・大島・徳之島・沖永良部島・与論島がそれにあたる。大島本島南部にも加計呂麻島・与路島・請島があり、遺跡も確認されている。これらの島々を「奄美」とか「大島」とか呼んでいるが、国土地理院では「奄美諸島」として全体を呼んでいることからここでは「奄美」を奄美諸島の呼び名にし、「大島」は大島本島指す呼び名としたい。

奄美の中でも特に徳之島・大島・喜界島に遺跡が集中しており、なかでも大島本島北部の東海岸は遺跡群を成している感さえある(第3図)。遺跡も旧石器時代の可能性の高い喜子川遺跡、国指定の宇宿貝塚、砂丘に立地するマツノト遺跡、長浜金久遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ等々が発掘調査されている(第4図)。時代も旧石器時代から12~13世紀までのグスク時代までを含めると、100を越す遺跡になる。ただし、グスクについてはまだ完全な分布調査が行われていないため、その数は不明である。グスクは各集落近くに1~3ヶ所は所在していることから、今後の調査が注目されるところである。

笠利半島と本島間の陸繋部には海拔40mほどの丘陵が本島から半島側へのびている。砂丘の形成についてはまだくわしく判明していないが、立地や地形の状況から南側から吹き上げられて広がっているようにも思われる。このような砂丘の形成は数回にわた



番号	道路名	所在地	備考	番号	道路名	所在地	備考
1	熊見川	道志	資料館	29	熊見川	道志	資料館
2	熊見川	道志	資料館	30	熊見川	道志	資料館
3	熊見川	道志	資料館	31	熊見川	道志	資料館
4	熊見川	道志	資料館	32	熊見川	道志	資料館
5	熊見川	道志	資料館	33	熊見川	道志	資料館
6	熊見川	道志	資料館	34	熊見川	道志	資料館
7	熊見川	道志	資料館	35	熊見川	道志	資料館
8	熊見川	道志	資料館	36	熊見川	道志	資料館
9	熊見川	道志	資料館	37	熊見川	道志	資料館
10	熊見川	道志	資料館	38	熊見川	道志	資料館
11	熊見川	道志	資料館	39	熊見川	道志	資料館
12	熊見川	道志	資料館	40	熊見川	道志	資料館
13	熊見川	道志	資料館	41	熊見川	道志	資料館
14	熊見川	道志	資料館	42	熊見川	道志	資料館
15	熊見川	道志	資料館	43	熊見川	道志	資料館
16	熊見川	道志	資料館	44	熊見川	道志	資料館
17	熊見川	道志	資料館	45	熊見川	道志	資料館
18	熊見川	道志	資料館	46	熊見川	道志	資料館
19	熊見川	道志	資料館	47	熊見川	道志	資料館
20	熊見川	道志	資料館	48	熊見川	道志	資料館
21	熊見川	道志	資料館	49	熊見川	道志	資料館
22	熊見川	道志	資料館	50	熊見川	道志	資料館
23	熊見川	道志	資料館	51	熊見川	道志	資料館
24	熊見川	道志	資料館	52	熊見川	道志	資料館
25	熊見川	道志	資料館	53	熊見川	道志	資料館
26	熊見川	道志	資料館	54	熊見川	道志	資料館
27	熊見川	道志	資料館	55	熊見川	道志	資料館
28	熊見川	道志	資料館	56	熊見川	道志	資料館



第3図 北大島道路分布図



ってくりかえされるため、第1次、2次、3次と砂丘の形成時の状況も今後は調査の対象にしなければならないだろう。これらの丘陵部分は北東方向に開く浅い谷を抱えているが、砂丘はさらにこの谷を埋め、笠利湾側の砂丘と繋がった形になっている。

遺跡のある砂丘が本島側から延びているのに対し、笠利半島側にはこれに対峙するような形で海岸段丘が広がっている。その段丘と遺跡側の丘陵とに囲まれて湿地帯が赤尾木湾へと開いている。海岸段丘に源を発する小川が段丘の端部に沿って湿地帯を流れている。

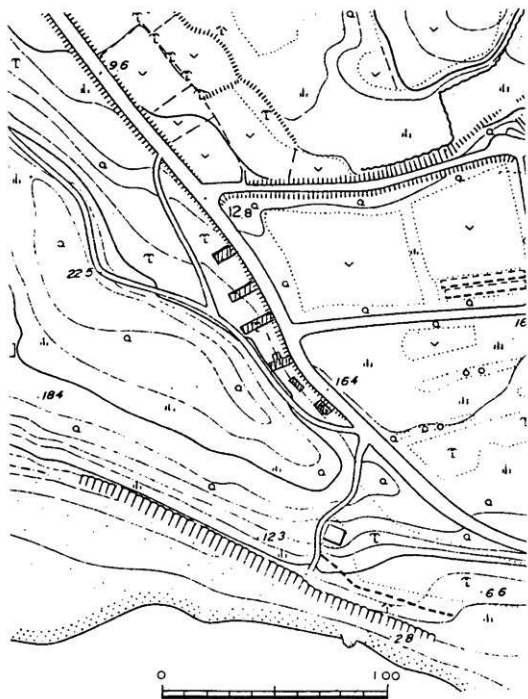
この赤尾木地区は北側と南側が最短距離で僅か約500mにすぎない。南東にはいくつかの「船越」があるが、ここでは戦後まで活用されていた。今でも「船引き道」が残っており、その時に唄われる労働歌「船引きイト」も残っている。歴史的にも貴重な湿地帯である。その他に集落内には数カ所の「ハヤ墓」もあり、北大島で一番大きな「赤尾木ハヤ墓」(町指定)もこの地区にある。大きなビーチロックを切り取ってつくってある墓は、洗骨された骨が壺や甕に収められ方形にビーチロックで囲まれている。まるで古墳を露出したような形である。

## 第2節 調査の概要

本遺跡は1981年6月に発見されたウフタ遺跡(ウフタ遺跡、熊本大学考古学研究室1982年)が調査された、遺跡の範囲は不明であったが、同一砂丘のため奄美特有の小規模遺跡が所在している可能性があり、今回の調査に至った。発掘地点は北側から第1トレンチ、第2トレンチとし、南側の最後が第7トレンチで終わっている。

砂丘のため砂丘断面を切断するような形でトレンチを入れて砂丘の新旧状態を観察しながら調査を進めた。前回の調査では兼久式土器、面縄前庭式土器、石器等が出上した。

今回は7ヶ所のトレンチを設け確認調査を行ったが、土器片とチップ1点の出土であった。遺跡は砂丘全体に広がっているものではなく、小規模のまとまりであった。グスクの文化層も確認されたが生活層ではなく、多少の遺物が入っていただけであった。この砂丘においては遺跡ではなく遺物散布地であったと言えよう。ただし本調査地区の砂丘には小規模遺跡の所在があるかも知れない。



第4図 トレンチ配置図

## 第3章 周辺遺跡

### 第1節 赤尾木地区の遺跡

赤尾木地区には、半川遺跡・ウフタ遺跡・ウギヤウ遺跡・赤尾木保育所遺跡、手広遺跡等があり、ウフタ遺跡・赤尾木保育所遺跡・手広遺跡などは、周知の遺跡である。特に、手広遺跡やウフタ遺跡については、発掘調査が実施されている。

#### 1. 半川遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木1,281、他にあり、笠利半島の基部の砂丘上に位置し、その基部は地峡部を呈し、その距離は1km弱にすぎない。遺跡の東側は笠利町との町境で、西側は赤尾木の集落となり、南側はそく海浜となり、遺跡地内を県道万屋－赤尾木線が南東から北西方向へ走っている。その県道の北側沿には、遺物包含層が露呈し、土器破片や貝類を検出した。土器は、小破片のために時期については不明である。その他、本遺跡からは貝類や磨製石斧などを採集した。1は磨製石斧で頁岩製の片刃の石斧であり、基部は欠損し、刃部は小さい刃こぼれが観察できる。

#### 2. ウフタ遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木1,328－8、他にあり、半川遺跡より北西へ約200mの県道万屋－赤尾木線西隣の砂丘地の宅地及び畑地に位置している。遺跡の北側は、赤尾木の集落が近く、西側は、バンガロー跡地や社会福祉法人星の園がある。遺跡は、本町が事業主体となり、昭和56年（1981）7月に熊本大学により発掘調査が実施されている。遺構は、堀込み遺構2基が検出されている。遺物は、土器や石器が出土した。土器は、縄文時代後期から弥生時代に相当する時期のものが見られている。これらの土器は、条痕文土器、面縄前庭式土器、嘉徳Ⅱ式土器、面縄西洞式土器、夜臼式土器、縄文時代晩期後半相当、弥生時代中・後相当などが出土している。石器は、石斧、凹石、クガニイシ、砥石、石鎌、スクレイパー、楔形石器、使用痕のある剥片、石核などが出土している。

#### 3. ウギヤウ遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木1,399、1,400、1,402－2、他にあり、笠利半島の基部、赤尾木地峡部のほぼ中央付近から西部にかけての砂丘上の畑地及び防風林を含む地域が推定される。遺跡は、社会福祉法人星の園の西側に位置し、周辺では砂採収事業が進

行中である。遺物は、砂丘上の畑地に散布しており、一部の畑地においては重機により表土が剥がれ、その一部に遺物包含層が露呈している。遺物には、土器破片や石器などが見られ、土器は小破片が多く、中には面縄西洞式土器がある。石器には、磨製石斧、研磨器等が見られる。1・2は、面縄西洞式土器で、3・4は、面縄西洞式土器系の土器破片と考える。5は、磨製石斧で刃部付近のみで、その大半が欠損している。6は、凹石で半分以上が欠損し、周縁には敲打痕を残している。片側中央付近には凹部を残し、磨石から転用が考えられる。7は、砂岩製の研磨器で不定形の表材を利用し、五面に溝状の凹部を作り出している。

#### 4. 赤尾木保育所遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木232-1、他にあり、赤尾木の集落内の砂丘地に位置している。遺跡は、赤尾木保育所を含むその周辺地域が推定されるが、今回の調査においては、周辺地域が調査不能地のため遺物の散布を確認することはできなかった。しかし、数点の貝類を採集した。以前、この保育所内より類須恵器、兼久式土器、貝小玉などが出土している。

#### 5. 手広遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木1,730、1,731、他にあり、赤尾木地峡部の西南基部で、国道58号線の根原バス停付近からのびる町道大美—赤尾木線の手広川橋付近の太平洋沿岸に形成された小規模な海岸砂丘地に位置している。

遺跡は、昭和54年(1979)12月に町の名勝天然記念物に指定されているが、以前の昭和51年(1976)に一部、昭和60年(1985)には、本町が調査主体となり、熊本大学により調査を実施し、調査の結果、7文化層を確認している。遺構としては、弧状配列ピット(第1文化層)、石組遺構(第3文化層より3基、第6文化層より1基)、集石遺構(第3文化層第7文化層)などを検出し、第3文化層で検出した1.2号石組遺構は、住居跡が推定され、第1文化層から遺構は、平地式住居跡と思われ、兼久式土器の時期における初例である。土器としては、第1文化層(兼久式土器)、第2文化層(刻目突帯文類似土器、板付類似土器、丹塗磨研壺形土器、外耳土器、台付土器)、第3文化層(リボン突起をもつ土器、長頸磨研壺形土器、尖底をもつ土器、台付土器、丹塗磨研壺形土器)、第4文化層(カウチバンタ式類似土器、外耳土器)、第5文化層(宇宿上層式土器、喜念I式土器、条痕文土器、黒色磨研土器)第6文化層(面縄西洞式土器、浅鉢形土器、壺形土器、外耳土器)、第7文化層(嘉徳I・II式土器)などが出土

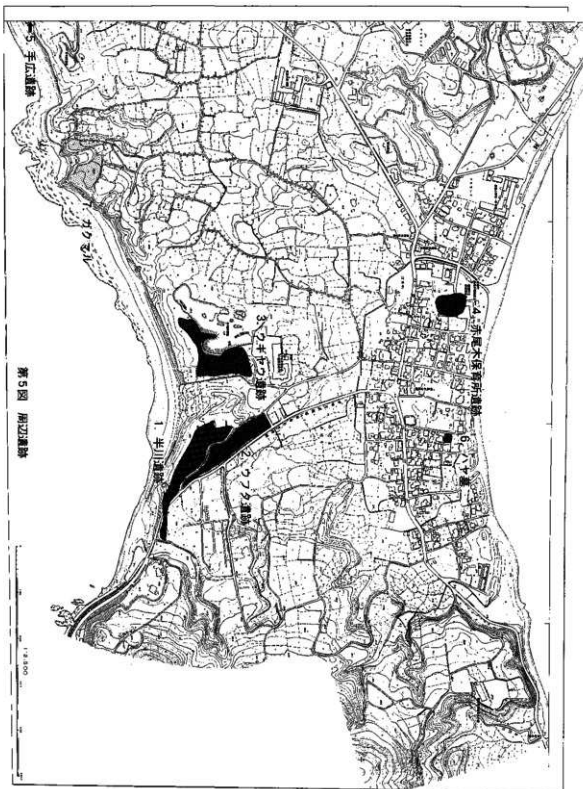


し、第2文化層は、刻目突帯文類似土器・丹塗磨研壺形土器などの存在により、弥生時代前期に相当する。第5文化層は、縄文時代晩期前半に相当すると思われ、黒色磨研土器、条痕鉢形土器も、この時期に該当する。第7文化層から出土した嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器は、縄文時代後期後半に比定されるとの報告がなされている。この他に、石器、貝製品、骨製品などが出土している。

その後遺跡は砂取り業者によって消滅させられるという運命にあった。業者と行政のミスによって貴重な遺跡が消されたことは非常に残念であり、奄美にとっても南島にとっても大きな損失である。確認調査を行った熊本大学白木原和美先生は当時、実習に参加していた学生達に特別にお願いして住用のサモト遺跡終了後手広遺跡の調査に入った。その時の費用は町教委と白木原先生のポケットマネーで行われていたことは知る人は少ないだろう。手広遺跡の発掘成果はこうした白木原先生の好意と経済的支援も頂いて行われたことをあえて記しておきたい。



手広遺跡 発見当時の写真



第5図 周辺道路

## 6. ハヤ基

赤尾木の北側海岸近くの砂丘にある、所在地は大字赤尾木186番地になる。大きなビーチロックを切って箱状に組んである。このような箱形石棺墓は北大島に多く見られる。一族の墓地であった「ノロ墓」であったりする。赤尾木ではこのような墓地把をハヤ墓と呼んでいる。江戸時代から明治初期まで使われていたが、現在は新しい墓地に移されている。ただし、以前の骨はそのまま納骨されている。昭和52年2月19日に指定。管理所有者は島納アキさん。

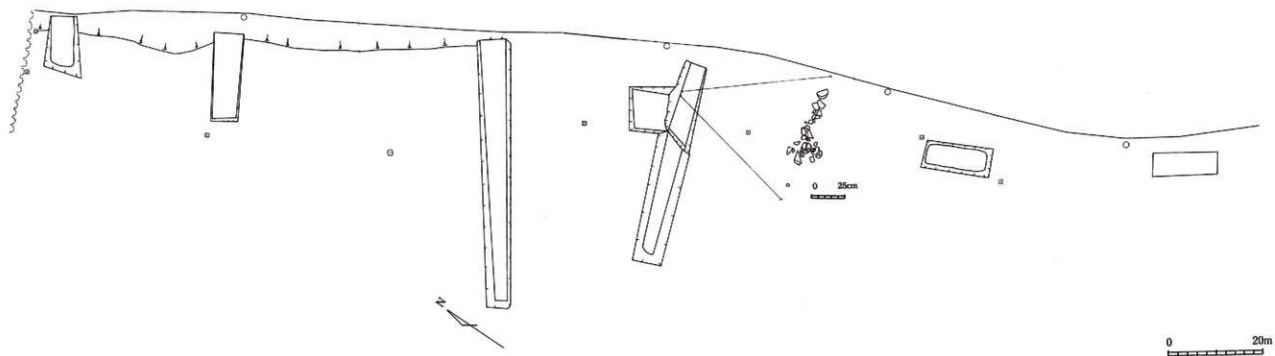


赤尾木 ハヤ墓

## 7. ガクマル

町は海岸の奇岩群を昭和54年2月20日に指定しているが、この台地は遺跡としての可能性が実に高い。無文も小片である土器片の表採されている。地形的な条件から察しても遺跡と思われる。近くの海岸には洞穴もあり、人骨がたくさん納められていたとされるが、台風で潮が入りだいぶ流されたとも言われる。風葬の跡とされ、土地の人があまり近づかない場所もある。





第6図 トレンチ位置図



## 第4章 発掘調査

### 第1節 層序

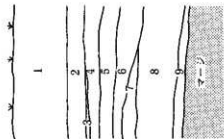
本遺跡の層序は砂丘の場所によってちがいが見られる。ここでは第1、2、4、6の各トレンチの層序を記録した。基本的にはグスクの層を第1文化層で土器片が第2文化層をなしている。

- 1層は表土である。草の根が多く、植物の植え替えも行われている。
- 2層は明褐色砂層である。旧表土
- 3層は白砂層をなす。第4トレンチは2層が黒褐色で3層は褐色層、4層が白砂層になる。基本的に第4トレンチでは4層が3層と同じになる。
- 4層明褐色砂層
- 5層褐色砂層、グスク時代の層である。第1文化層、出土遺物はなし。

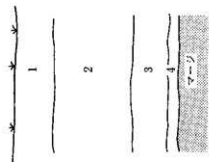
以上が第1トレンチ

- 1層 土俵
- 2層 黒褐色砂層、グスク（第1文化層）貝、類須恵器
- 3層 明褐色砂層
- 4層 白砂層
- 5層 明褐色砂層であるが無遺物層である。
- 6層 褐色砂層、遺物包含層（第2文化層）土器片出土
- 7層 明褐色砂層、出土遺物はない
- 8層 白砂層無遺物層である
- 9層 黒褐色層、粘土と砂が混ざっており、マーヅ直上げである。下層はマーヅ粒がある。この層は第4トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチ、第7トレンチにも共通する。
- 10層 マーヅ層である。

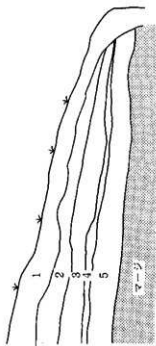
以上が第14トレンチである。文化層はあるが遺物を包含する層はない。全体的に生活面としてとらえられるが生活範囲としては入っていない。



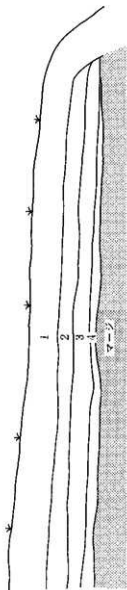
第1トレンチ



第1トレンチ



第1トレンチ



第1トレンチ



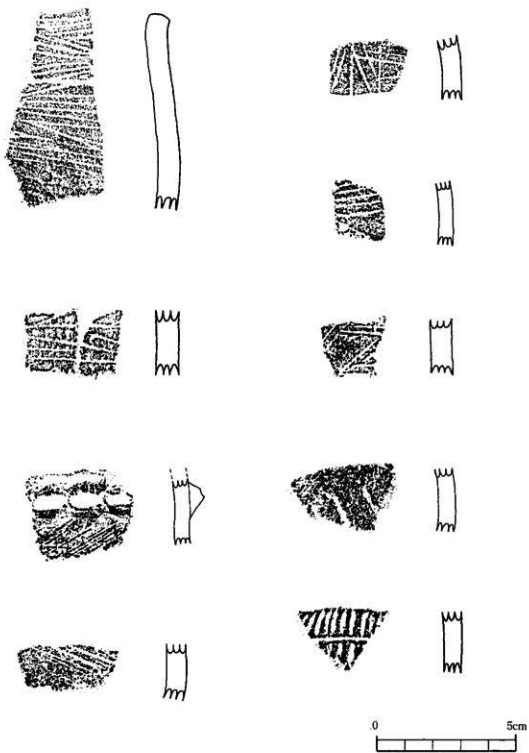
第7図 層序



## 第2節 出土遺物

ウフタ遺跡からの出土遺物は少なく土器片はわずか53点、類須恵器1点、貝約100点だけである。土器片53点は小片が多く点数は多いが、量的には少ない。一括して出土した土器片は同一団体で半分程復元出来た。

土器は宇宿下層式土器で面縄西洞式、嘉徳式、下山田タイプの三種類が出土している。第4トレンチ出土の一括資料は下山田タイプである。小型の深鉢型土器で口縁部は2対の波状口縁である波状の先端部分は凹文がある。文様帯は口縁部分に限られており胴部から底部にかけては無文である。文様は波線で刻されており、波状先端下は縦位波線で他はヒシ形文を思わせる三形文である。焼土はやや良く全体的にザラザラしている。器形は胴部がやや張り、壺状になるかと思われるが、口縁部の大きさなどから深鉢とした。



第8图 土器测定图

### 第3節 自然遺物

本遺跡出土の貝類は少なく、貝類も下記のとおりである。

中 腹 足	ソデガイ科	スジガイ
中 腹 足	ソデガイ科	マガキガイ
異 歯 目	シャコガイ科	シラナミ
異 歯 目	シャコガイ科	ヒメシャコ
異 歯 目	シャコガイ科	ヒレジャコ
新 腹 足 目	イトマキボラ科	イトマキボラ
原始腹足目	リュウテン科	チョウセンサザエ
新 腹 足 目	オニコブシ科	コオニコブシ
原始腹足目	リュウテン科	ヤコウガイ
〃	タカラガイ科	ハナマルユキ
異 歯 目	マルスタレガイ科	ヌノメガイ
異 歯 目	マルスタレガイ科	サツマアサリ
原始腹足目	アマオブ科	アマオブネ
新 腹 足 目	アッキガイ科	アカイガレイシ
異 歯 目	マルスタレガイ科	コンゴウハマグリ
原始腹足目	アマオブネ科	オオマルアマオブネ
新 腹 足 目	イモガイ科	ヤナギシボリイモ
中 腹 足 目	オキニシ科	シロミオキニシ
原始腹足目	ニシキウズ科	ニシキウズ
異 歯 目	ニッコウガイ科	ホシダカラ
		サメザラ
貧 歯 目	ウミギク科	ウニメンガイ
貧 歯 目	イタボガキ科	ベニガキ
真多歯目	フネガイ科	ベニエガイ
新 腹 足 目	イモガイ科	マダライモ

## 第5章 調査の成果と今後の課題

開発に伴う発掘調査がここ数年毎年行われている。奄美ではまだ埋蔵文化財の調査については完全に行政、住民、企業が理解を示している訳ではない。ややもすると文化財が開発のじゃまになるような受け取られ方もする。本遺跡はこのような開発と文化財保護の立場がスムーズに進んだと思う。開発に先行し、文化財の有無の確認、町教委との話し合い。県文化課との話し合いなどが進み、工事を発注する前に文化財の調査が行われた訳である。他の市町村もそうあって欲しい。

発掘調査は砂丘上に立地する遺跡がどのような広がりがあるのか、砂丘の形成状況などを見ながら調査を進めた。結果、砂丘全体に遺跡は広がってはいない。ただし、今回調査した場所にはなかったが、近くには生活面などの遺構や遺物があると思われる。第4トレンチにおいては土器がまとまって出土しており、文化層としての広がり確認出来た。

ここでは文化層としてのとらえ方は当時の生活面の広がりとしてのとらえかたである。空間的な広がりや時間的なとらえ方である。もうひとつ上層に確認された類須恵器の出土するグスクの文化層は時間的な差としてとらえられる。この二つの文化層はいずれも遺構の検出はなく、遺物の散布だけであった。

砂丘は現在の地形に沿ってマージ層も発達しており、砂丘部分は道路から両側に形成されているのみであった。全体的に砂丘のようであるが、道路より東側へゆるやかに斜向しており、湿地帯になる。西側の砂丘は南側からの吹上げによる砂丘の堆積のしかたであり数回にわたって形成された砂丘である。

今回の調査で遺構の確認はなかったが、遺物が散布していることから近くに遺跡が所在している可能性が充分あり、開発を行う場合は町教委と連絡を取り合っていく必要がある。近くには半川遺跡、ウギョウ遺跡などもあり、もう少し西側に行くと有名な手広遺跡に続く砂丘である。龍郷町でも遺跡の密集している地区でもある。町教委には一日も早い文化財保護行政の担当職員の配置をお願いしたい。今後の文化財保護はこれから増々多忙な毎日になる。住民が文化行事を強く望んでくるのは見えてきており、今からその対策を講じなければ手遅れになることも見えている。ぜひお願いしたい。

今回の調査をまとめるにあたり、町教委の職員をはじめ国学院大学大学院生の養島栄紀君には種々難多な仕事をして頂き、大変助けて頂いた。白木原和美先生には現場においても指導を頂きました。県埋文センターの立神次郎氏には分布調査の資料など

を使わせて頂いた。ありがとうございました。編集後半には熊本大学松村智行君にも手伝って頂いた。



赤尾木地区 上 笠利上空から、下 東海岸から



発掘前 上 南側、下 北側



上 遺跡南側の東海岸、下 遺跡より集落





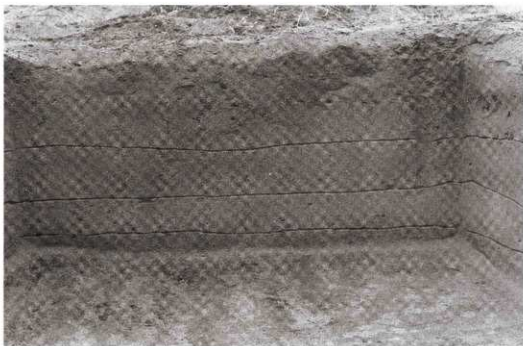
第7区 トレンチ



第4区 遺跡出土状況



出土土器



上 第3トレンチ、下 第2トレンチ 層序



発掘スナップ

## ウフタⅡ遺跡

1995年3月31日

編集・発行 龍郷町教育委員会

〒894-01 大島郡龍郷町浦110番地

TEL (0997) 62-3111

印刷 鮮明堂

〒894 名瀬市末広町18番5号

TEL (0997) 52-5757